

「サラリーマンの聖地」ニュー新橋ビルを「見る」

□ニュー新橋ビルの概要

ニュー新橋ビルは、新橋駅前にある、地上11階地下3階の比較的大きなビルである。よくテレビのサラリーマンへのインタビューに出てくるSL広場に隣接している。地下1階から4階までが商業スペースで、5階より上はオフィスになっている。オフィスに入居しているのは主に中小企業であるようだ。1フロアを占有して借りることはなく、1室ずつ借りているようである。地下2、3階は駐車場である。複合型商業施設である。テナントについては次項で各階ごとに記述する。

フロアは台形の形をしていて、周囲の通路とその内部を貫く十字の通路で構成されている。雑居ビルなのでテナントが細かく入っていることも手伝って、回遊性が高いように感じられる。方向感覚がつかみにくいので、たとえ目的の店があったとしてもそこまでいくのに慣れていないとうろつくことになる。このうろつきが他の店に入るきっかけにもなるのだが、回遊性の原理がニュー新橋ビルにも働いているのかもしれない。

このフィールドノーツは、カフェ・ラミルというニュー新橋ビルの1階にあるビルの出入口が見渡せる場所で書いている。ビルに入ってくる人のすべてが客ではないが、圧倒的に中年男性が多い。学生風の人はずいぶん。新橋という場所性もあるのだろう。

□各階の様子、来街者の種類

18時30分に神谷町でのアルバイトを終え、18時45分ごろにはニュー新橋ビルに到着した。最初は1階を見て回る。1階はかなり人通りが多い。多くはサラリーマン風の中年男性である。小雨が降っているので、駅への通り道として利用している人も多いのかもしれない。金券ショップが1/3ぐらいで、どの店もかなり盛況である。入るには人を分けて入らなければならないぐらいだ。金券ショップの店構えはかなりオープンだが狭い。客層もほとんどが中年男性である。1階の残りの2/3は洋服の青山、パチンコ屋、喫茶店（2軒）、ドラッグストア、漢方の店などで構成されている。複合型商業施設の1階にありがちなコンビニがない。全体でも有名チェーンは洋服の青山とドラッグストアのミネドラッグだけである。

2階は少し異様な雰囲気、マッサージ店が多い。マッサージ店は若い女性が露出の多い服で客引きをしている。ホットパンツにTシャツだったり、チャイナドレス風だったり、マッサージ店と銘打ちつつ、怪しいサービスがありそう。客引きされるのでぐるぐる見て回るができず、1周しかできない。何度も回っていると怪しまれるからである。怪しまれることに関するいろいろな思いは後述する。マッサージ店も客引きをしている店としていない店がある。客引きをしていない店は漢字でいろいろ効能が書いてあり、やや真面目な雰囲気がある。サービスに違いがあるのかもしれない。他にゲームセンター、居酒屋、風俗店などがあった。1階は歩いている人の男女比が8：2ぐらいだったが、2階より上は9.5：0.5ぐらいだ。0.5の女性はそこで働いていそうな人なので、来街者は10：0である。男しかいない。

ちなみに、ノートを書いた後に2Fにいったマッサージ店の数を確認してみたが、書いているときに思ったよりもその数は多くなかった。受けた印象と現実はかなり違う。この違いは良いとか悪いとかではなく、私が何に目がいつてるかが明らかになる。それだけマッサージ店に印象を受けたということである。

3階は法律関係の事務所が多く、訪れたときには既にシャッターが閉まっていた。半分以上は閉まっていたが、目立ったのは雀荘。外から見える限りでは、かなりゆったりとした雀卓の配置で中年男性というよりは、壮年男性が打っていた。ここにももちろん男しかいない。2階よりはマッサージ店が少なくあまり客引きはされなかった。喫茶店は2軒あり、いずれもチェーンではなく昔からあるような店である。ガラス張りで店内がよく見える。ガラガラである。それぞれ2組ぐらいしか客がいない。それに対し、他の店（マッサージ店、雀荘、居酒屋など）は店内が見えにくい、というより見えない。4階も法律関係の事務所が多い。雀荘と囲碁クラブ、鉄道関係のホビーショップがあった。囲碁クラブは活気があったが内部を伺い知ることはできなかった。3階と4階は人通りがまばらでシャッターが閉まった店や事務所が多い。

最後に、地下1階に向かった。地下1階は居酒屋がメインで、マッサージ店も数店あった。ゲームセンターも2軒あった。ゲームセンターには若い男性もいた。1階から4階はほぼ中年や壮年男性ばかりだったので新鮮である。地下1階の居酒屋は若い女性が客引きをしている。居酒屋の客引きが声を掛けるのは2人組以上で、私には話しかけてこない。それに対してマッサージ店の客引きは1人でも声を掛ける。しかも、店の前が公道ではないので堂々と客引きができる。客は飲み目的で来ている人ばかりであるから成功率は高いということなのだろうか。

□調査者としての自分——場に適した人間であろうとしてしまう

なぜ客引きや店員、来街者の人たちに怪しまれたら困るのであろうか。怪しまれたとしても通報されるわけではない。怪しまれたとしてももうその人には会わないのだから関係ない。怪しまれたくないのは私が調査者ではなく、一來街者としての体裁を取りたいからである。もしくはどの店に入ろうか迷っている、もしくは入りたくても入れない勇気のない人間と思われたくないという妙なプライドがあるかもしれない。そうした複雑な心情のもとで、とにかく一度通り過ぎたら、もう二度とそこは通りたくないと考えてしまう。

過去にもよく似た経験をしたことがある。私の研究対象は住宅地なのであるが、新規に分譲されている住宅地を見学する際には、客のフリをする。既に分譲を終えている住宅地の場合は地図を片手に、何らかの理由で調査している人を装う。住んでいる人たちに自分は危険ではなく、場に適した人間であるということをアピールするのである。

□比較から見えてくるもの——うえほんまちハイハイタウンとの比較

ニュー新橋ビルを歩いていて思ったのは、大阪の近鉄上本町駅前にある「うえほんまちハイハイタウン」との共通性である。うえほんまちハイハイタウンは地下1階から5階までが商業施設で6階より上が住居になっている。ニュー新橋ビルと同じく地下1階には居酒屋がメインで構成されてお

り、1階にはゲームセンター、3階には雀荘が入っている。ニュー新橋ビルが完成したのは1971年なのに対し、うえほんまちハイハイタウンの完成は1979年なので上本町のほうが8年ほど新しいのだが、内装の感じやところどころ空きテナントがあることなど、内部の雰囲気は似ている。

しかし、決定的に違うのは、うえほんまちハイハイタウンは女性客を対象としたリラクゼーションサロン（※マッサージ店ではない）があったり、中年女性向けのブティックや日用品を売る店があったりすることである。ニュー新橋ビルの場合は、明らかに男性向けのマッサージ店や風俗店、若い女性が客引きをする居酒屋など、女性の「性」が商品化されている。その光景は上本町にはない。

うえほんまちハイハイタウンの場合は地元商店街からなる組合施行で再開発が行われ、一体的な取り組みが行われている。今でも「ハイタン」というパンフレットが発行されていて、ビル内で配られている（「ご自由にお取りください」形式）。また、ホームページがしっかりと運営されていて、ビル全体で盛り上げていこうとしている。それに対して、ニュー新橋ビルの場合は、戦後の闇市だった区画を東京都がイニシアティブを握って、区分所有型のビルとして開発をしたようである²⁾。そのためか商店会は階ごとに形成されていて、ビル一体としての取り組みはあまりなくホームページも存在しない。

したがって、上本町の場合は、再開発で入居するテナントがある程度それまでの商店街と連続していることや、家族的な空間を含めた日常生活の場になっているのに対して、ニュー新橋ビルの場合は家族的な空間から切り離された、そして仕事空間からも切り離された盛り場としての「第三空間」的な場所なのではないだろうか。だからこそ、性的なものを売りにする産業がテナントして入るし、そういう商売が成立するのではないか。

□反省点

限られた時間の中で回っただけなので、ニュー新橋ビルのほんの一部しか見ていない。客として来ている男性よりも、店や店で働いている人たちに目がいった。ビル内を歩いている客の様子や居酒屋やゲームセンターで取り交わされているサラリーマン同士のコミュニケーションを見ることも必要だったかもしれない。

フィールドノーツはA5のメモを使ったが、手軽に持って書けないため、もっと小さなものを使用すべきだと思った。次回以降は、フィールドノーツを喫茶店でまとめて書くのではなく、状況をつぶさに記述できるようなものを用意しようと考えている。

注

1) 港区産業観光ネットワーク MINATOあらかると ホームページ http://www.minato-ala.net/commerce/watch/watch_old.html 参照

2) 同上